

閑話三題

東北大学
浅井 圭介*



“sandglass”

学生時代に場末の名画座で観た「ベニスに死す (Morte a Venezia)」の劇中、主人公の Gustav von Aschenbach が、砂時計についての思い出を次のように語っていました。

“I remember...we once had one of those...in my father’s house. The aperture through which the sand runs is so tiny that, at first, it seems as if the level in the upper glass...never changes. To our eyes, it appears that the sand runs out only...only at the end. And until it does, it’s not worth thinking about. Till the last moment...when there’s no more time...when there’s no more time left to think about it.”

「気付いたときには、時すでに遅く、砂は何も残っていない」—人というものは、自身の「命の砂時計」中の残砂の高さ (the level in the upper glass) を知りえない—これが (主体としての) 人間の命の本質的様態なのでしょう。では、主体を離れた客観的存在については、どうなのでしょう。様々な社会、組織、…それら具体例の中で殊更「学会」に着意するのは、我々にとって自然な流れでありましょう。その「命の砂時計」の様態は、一体どんなものなのでしょう。その砂のレベルは、やはり不可知なのでしょう。それを探るための寄す処 (便) を、ここで考えてみたいのです。

“paradigm”

手垢塗れのこの言葉を、斯様な便の 1 つとしてとりあげてみます。Thomas S. Kuhn (今年は、彼の生誕 100 周年です) が提示したこの概念は、彼の意図するところを甚だしく逸脱して拡大解釈され、誤解・誤用

され続けてきました。そもそも Kuhn は、これを、極めて限定的な自然科学上の概念として定義—むしろ「創造」—したのです。ここでは、提唱者 Kuhn による原義と議論に則って考えてみましょう。Kuhn によれば、paradigm とは、「科学者集団の成員達が共有しているもの」、しかも、「当該成員達だけが共有しているもの」です。逆に、「それ以外の点では無関係な人びとの集りを科学者集団としているもの」は、「彼らが共通の paradigm をもっていること」なのです。Kuhn は、様々な言い換えとともに、言葉を尽くしてこの概念を説明しています。その中から、ここでは「paradigm は、ある集団の成員によって共通して持たれる信念、価値、テクニクなどの全体的構成を示す」という一文を取り上げておきます。この paradigm は「特定時期の科学の解釈的基底 (hermeneutic basis)」を包含し、これを通して、現行世代は直前の世代から一群の重要概念を、ある種の「文化」の形で継承します。Kuhn は、paradigm の諸要素をさらに厳密に解析し、「記号的一般化 (symbolic generalization)」、「paradigm の形而上的部分、モデル、または特定のモデルに対する確信」、「価値」、そして「模範例 (exemplars)」の 4 つから構成される (paradigm の展開形としての) “disciplinary matrix” を提示しました。そして、この包括的概念を使って、科学者集団のもつ context の中でのみ有意なものを議論しようとしたのです。さらに、この disciplinary matrix の内容を明確化するために、「通約不可能性 (incommensurability)」という用語を数学から借用し、「ある科学者集団での paradigm の確立は、他の集団との間の根源的な incommensurability を生む—この二つは不可分の概念である—」と主張しました。他との間に、これをもたない科学者集団の raison d’être は、無きに等しいということになるでしょう。

さて我々—当学会の成員—は、Kuhn の原義に則った paradigm を、hermeneutic basis を、disciplinary matrix を、共有しているのでしょうか。他分野・他領域との間

Does this sound like gibberish?

Keisuke Asai* (Department of Applied Chemistry, Graduate School of Engineering, Tohoku University),
〒980-8579 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉 6-6
TEL: 022-795-7219, E-mail: keisuke.asai.c8@tohoku.ac.jp

で incommensurability を保持し得ているでしょうか。このようなスキームで、学会の「命の砂時計」の様態・現況を把握し得たら、次に一体何ができるのでしょうか。ここでも、先人の叡智は、我々に深遠な示唆を与えてくれるようです。

“muddling through”

18 世紀のイギリスで生まれたこの言葉は、「遠くの見通しが見つからない中でも、積極的に当面の困難に立ち向かい、それを切り抜けて大きな成果につなげる」¹⁾ ことを意味します。先が見えない状況下、能力・知力の限りを尽くして、時宜に即した態勢を整え、臨機応変に対処しつつ、そのプロセス自体を何ものにも代え難い楽しみとする—まさにアングロ・サクソン文化・民族性の強靱さを象徴するものです。この「プロセス自体に情熱を注ぐ態度」が、混迷を極める状況を生きるために不可欠だということなのでしょう。「本質はプロセスにこそ存在する」のであれば、muddling through—泥に足を取られながら突き進む道程—において、相応しい行き着き先が指し示されていくのでしょう。とは言え、ひたすら前進というわけにはいかず、ある局面で「撤退」を余儀なくされることもありましょう。我々日本人は、一般にこれを非常に不得手としています—況して我々は…。この手の営為は、人間の価値観によって形成され、その場その時の context によってダイナミックに動く現象を扱うものです。この現象が生起する世界は、当該 context に依存する「解釈」によって成り立っています。これを相手にすることは、我々のような自然科学を生業とする者—つま

り、「事象を特定の context から独立させてとらえ、普遍妥当の原理原則を追究する」者—にとっては至難の業です。context に応じて場を創造する勝負に、我々が勝算を立て得るか…けっこうきついですね。となれば、我々（のみならず、日本人一般）の取り柄である“negative capability”²⁾—我々の (character ではない) personality であり、受け身の能力—まさに「まわりの影響を受けて自らを変容させていく能力」—を活かして、徹底して muddling through していくしかないでしょう。そうすれば、行き着く先がどこであれ、そこは、我々成員一人ひとりにとって納得し得る処となるでしょう。もしこのまま、規模において縮小し続けるのであれば、一般的な意味での学会というものを原義的に形成する「Kürwille (観念的または作為された意志)」に基礎を置く生き残り策を脱却して、思い切って、「Wesenwille (本質的意志)」に基づく愛着的結合による Gemeinschaft 的集合態に変容させてしまう手も…。ただし、この場合、自らこねた毒饅頭を喰らわないようにすることが肝要ですが…。いずれにせよ、泥だらけになるのであれば、存亡の機を止揚の解の導出で乗り越える嚆矢としての役割を果たしたいものです。

〈参 考 文 献〉

- 1) 中西 輝政, なぜ国家は衰亡するのか, PHP 研究所, 1998.
- 2) 鶴見 俊輔, 関川 夏央, 日本人は何を捨ててきたのか, 筑摩書房, 2011.